

私が教員を目指そうと思ったのは中学 2 年生の時でした。私が当時中学生の時、すごい学校現場が荒れていて、私も当時いじめられていました。担任の先生に相談しても特に何もしてくれず、部活でもレギュラーも取れず、何をしに行っているのかもわからず、正直学校に来るのが苦しい時期もありました。でもそんな時も、顧問の先生は私を見捨てず、相談にも親身に聞いてくださり、問題解決の手助けもしてくださったおかげで、一度も登校拒否になることなく中学校生活を終えることができました。もともと数学は好きで、友達に教えることにもやりがいのようなものも感じていましたし、尊敬する先生へのあこがれと、母の勧めもあってそのころから教員というものを目指そうと思いました。その決意ができた母校で実習生として帰ることができたのはとても誇らしいです。

私は中学校へ教育実習に行きました。最初は三週間という期間がとても長く感じ、無事に終われるか不安でした。この考えをしているのは私だけでなく、実習の前の授業での班員や、同期の教育実習生も同じ考えでした。出てきた意見は、「生徒と距離を縮めることができるか」、「授業を上手くすることができるか」、「体調を崩さず通勤し続けられるか」、「指導教員の方と良い関係を築けるか」など。また私個人の気持ちとしては、人生の大きな分岐点にもなり、多くのことを経験した中学校なので、楽しい思い出だけでなく、つらい思い出もあり、教育実習に行く気持ちが上がらないのが正直な気持ちでした。

教育実習に行く二週間前、教頭先生、校長先生、そして指導教員である M 先生との事前打ち合わせがありました。先生方から二週間後に迫った教育実習に対する激励の言葉ももらい、積極的に行動をするようにと言われました。わからないことがあれば、勝手な行動はせず先生方に聞く、教材や機材なども積極的に利用、子どもたちとは自分からも近づいてみる、などです。特に M 先生からは「上手くやろうとしなくていい。そのほうが変に定形的になってしまって、君らしさが出ない。例え君が失敗してしまったとしても、後で僕が何とでも立て直すことが出来るから。自分の出せる力を精いっぱい出し切って、頑張ってください。」とのお言葉をいただきました。この言葉は実習期間中つらくて迷ったときにすごい背中を後押ししてくださいました。M 先生は私が学生時代の時も授業をしてくださっていて、私のことも覚えてくださっていました。当時から、非常に分かりやすい授業をしてくださっていて、私の尊敬する先生の一人です。そんな先生が定年を迎え、非常勤として来てらっしゃるのに、私の指導教員を受けてくださり、多くのアドバイスをくださり感謝の気持ちでいっぱいです。

私の担当させていただいたクラスは 1 年生でした。まだ、中学生になってから 3 カ月も経ってない 1 年生たちでしたが、私の実習初日から生徒たちから声をかけてくれて、早い段階で生徒たちと意気投合できたのはよかったです。大学の教育実習担任である S 先生がおっしゃっていたように、若いというだけで生徒たちは寄ってくるのを実感できました。ただ、苦労したのが生徒たちの名前を覚えることです。1 年生のクラスは 1 クラスあたり 37 人いて、全部で 7 クラスありました。私は担任させていただいたクラスの他にも 2 クラスで授業をさせていただきましたので、100 人以上の生徒の名前を覚えようとするのは大変でした。名前を覚えておくといいと考えたのは、「生徒と交流を持ちやすくなる」、「授業をスムーズに進められる」、そして何より「生徒は名前を覚えてもらえるとうれしい」と思った

からです。最終的にはクラスの生徒は完璧に覚えられ、他のクラスも半信半疑ではありますが覚えることができました。

私が授業をさせていただいたのは、二週間目の月曜日からでした。しかし、その二週間目の木、金曜日には中間テストがあり、私が授業を引き継いだ日にはまだテスト範囲が終わっていませんでした。また私がやる範囲も新章のところで、生徒たちが何も知らない範囲を教える、そしてテスト前ですので理解しやすい授業をしなければならないというとても大変で、貴重な体験をさせていただきました。そんな中、私が一番気をつけたのは生徒の反応です。間違っても、私ひとりの自己満足の授業にせず、生徒参加型の授業にすることで生徒の意識を集中させることを意識しました。M先生のアドバイス、そして生徒達の理解の良さもあって、無事に乗り切ることができました。そして、テストも終わったので三週間目からは授業毎に振り返りシートというものを書いてもらいました。この振り返りシートには、その日の授業の内容を振り返ってもらったり、わからなかったことや質問を書いてもらい、授業毎に回収し点検することで生徒の学力向上のために工夫しなければならない点を見つけたり、生徒との交流の一環として始めました。そんな中、最終日の研究授業の日になりました。研究授業では指導教員であるM先生はもちろん、校長先生、教頭先生、また新任指導の先生や他の数学の先生、他教科の先生もお忙しい時間の合間を縫って見に来てくださいました。緊張した中私はいつも通りの授業を行い、自分の中では無事に終わったと思っていました。しかし、先生方に見学に来てくださったお礼を兼ねて感想を聞きに行くと、なかなか厳しい意見をたくさんいただきました。黒板を見ながらしゃべっていた、生徒を当てるのだけでは生徒参加型授業とは言えず生徒達自らに発表させる機会を与えるべき、意図を持って机間巡視していたか、授業が面白くない、などまだ書ききれないほど意見をいただきました。特に生徒をまだちゃんと見ていないと言われた時は、初めに私が掲げた気をつけたいことができてなかったのも、すごいショックでした。自分の不甲斐なさ、自分のわかってはいたが力不足を実感し、悔しい気持ちがこみ上げたのと同時に、生徒達に情けない授業をしてしまったことに対する申し訳ない気持ちがこみ上げてきました。そんな時、振り返りシートを確認してみると、生徒達は私の二週間の授業の感想を書いてくれました。その中には、「S先生の授業はとてもわかりやすく、おもしろかったです」、「先生のおかげで少し数学が好きになりました」、「絶対本物の先生になってください」など書いてあって、私は涙をこらえずにはいられませんでした。私のような授業でも理解してくれた生徒はいたし、生徒達の期待にもっと応えていきたいと思えることができました。ここで私は、学校は先生が勉強を生徒に教えるだけでなく、先生が生徒から教わるのがたくさんあるのだと実感しました。教員採用試験に絶対合格し、先生方の意見を参考にし、もっと頑張りたいと思いました。

さらに私は授業だけでなく、生徒指導の場面にも立ち会いました。一週目の木曜日のことです。生徒達はその日の6時間目の総合の時間に、先日林間学校で宿泊した旅館に感謝の色紙を書いていました。その時間には書ききれなかったのも、まだ書いてない人は放課後に書くようにと教壇の机の中に色紙をしまっておきました。そして、放課後掃除が終わり、数人の生徒が残り色紙を書いていました。しかし書いている途中で生徒同士で気が高ぶってしまったのか、教室で暴れまわりました。その空間には担任の先生はおらず私しかいなかったのも、すぐに落ち着くように指導したのですが事態は収まりませんでした。そして、暴れまわっていたある生徒がわざとではないのですが、色紙を折ってしまいました。もちろんそ

の色紙は出せないのです、すでに書いてある生徒たちにも書きなおしてもらわなければなりません。私はその暴れまわっていた生徒に指導しました。自分の身勝手な行動で他の人に迷惑をかけてしまうこと、先生の言うことに耳も傾けず勝手なことをしていると大変なことになること、しっかりみんなの前で正直に話し、誠心誠意謝ればみんなも理解してくれる、ことなどを伝えました。また私は自分も昔暴れまわって先生によく怒られたなど自分の体験も話し、失敗してしまったことを次の経験に活かし同じ過ちを繰り返さない大切さを指導しました。その生徒達は翌日の朝の HR でみんなの前で正直に話し謝り、みんなも理解してくれました。こういう失敗というのは、ただの誤りではなく成長するための過程であり、自身でしっかりと受け止めなければなりません。私は指導することで生徒達の成長する場面に携えたことに教員としての誇りを感じました。

また私は先生方の授業以外の仕事にも参加させていただきました。学校全体の体力測定の実行係、プール掃除など普段見られない先生の姿を見られました。また二週目の土曜日には PTA のバレーボール大会に教員チームとして参加させていただきました。担当しているクラスの保護者の方々と交流させてもらい、子どもの家での様子や、学校に楽しく通っているかなど色々貴重な話を聞かせてもらって地域の人々と交流できる教員にとっても大切なことにも携わせていただきました。さらに授業以外と言えば部活です。私はサッカー部の指導をさせていただきました。いつも非行的な生徒も部活の時間になると眼の色が変わり、とても充実してそうでした。生徒にとって学業は大切ですが、部活動がメインで学校に来ている生徒がいても私はいいと思います。だからといって、学校生活で非行的になるのはよくないので、ここでも教員というのは力を発揮しなければならないなと思いました。

三週間の実習が終わり、私は教員の過酷さ、厳しさを実感しながらも、生徒達との間に教員のやりがいを感じ、教員になりたいと気持ちがさらに強まりました。また、実習当時の生徒達との思い出が今の教員になりたいという思いの強いモチベーションになっています。この実習に関わったすべての先生、生徒に感謝し、今年度の教員採用試験に合格し、来年より教育者として教壇に立てよう、これからも日々精進していきたいです。